

經濟論叢

第125卷 第3号

哀 辭

故穂積文雄名誉教授遺影および略歴

フランス貴族商業論のひとつま 補論 ……………	木 崎 喜 代 治	1
比較生産費説・国際価値論・貿易利潤(中)……	本 山 美 彦	20
ディルクの剰余価値論(上)……………	岸 徹	47
19世紀末ドイツにおける「本源的蓄積」と		
土地所有(2)……………	加 藤 房 雄	66
追 憶 文		
先生の思い出……………	伊 達 功	84
穂積文雄先生を偲ぶ……………	桑 田 幸 三	92

經濟学会記事

昭和55年3月

京 都 大 學 經 濟 學 會

記 事

経済学会大会

久しく休会していた本学会大会が昨年11月2日、経済学部特別講義室に80余名の会員の参加を得て、再開された。

報告者と論題は次のとおりである。

- I 杉本昭七氏（京都大学経済研究所助教授）
「現代資本主義論の系譜」
- II 飯野春樹氏（関西大学商学部教授）
「経営組織論の現状と課題」
- III 山田浩之氏（京都大学経済学部教授）
「都市問題の経済分析」

杉本会員は、第II次大戦後の現代資本主義研究に見られるいくつかの類型、すなわちマンデル、ローソンの「不均等発展法則の直接的適用論」、ハイマーの「調和的帝国主義論」、マゴドフの「アメリカ超帝国主義論」、ブーランツァスの「統合的帝国主義論」を批判的に検討し、現代資本主義の解明には、アメリカを中心とする世界経済の構造と、世界的規模の分業を内化した多国籍企業に見られる生産力・資本の集積構造、アメリカの先端技術部門が各国の産業構造に与える影響、軍事、通貨、援助等とおおしてのアメリカの国家としての活動、という三つのレベルから分析する必要があることを指摘した。

現代社会において組織は重要な意義をもっているが、飯野会員の報告は、マクロのおよび機能的な従来の組織構造論に、人間＝個人の視点を導入して組織論の革新を行なったバーナード理論の現代的意義をめぐるものであった。氏はとりわけ、組織目的の達成度から見た「有効性」、個人動機の充足度から見た「能率性」という二つの概念と組織における両者の統合の必要性をバーナードが主張した点を高く評価し、バーナードの方法はたとえば、外的環境と企業のあいだに起こる公害問題の回避や、日本企業の海外進出にともなうトラブルの解決等に有効な視角を提供していると論じた。

山田会員はまず都市経済学の存在理由として、都市において相互に関連しながら発生している住宅・土地問題、環境問題、交通問題、財政危機、社会的病理現象などの諸問

題が、個々の経済学では解明できない点を論じたのち、これらの都市問題をもたらす基本的要因として、都市化につれて進行する職住分離・社会階層分離のセグリゲーション、他方での住工混在に見られる都市の土地利用構造の変化を重視すべきであるという考えを述べた。氏は土地の利用構造の背後に所得分配の不平等があることを指摘し、都市問題の要因としてよく言及される社会資本の不足、過度の集中なども、これらの基本的要因によって説明すべきであるという見解を報告した。

報告の論題がいずれも現代のトピックスにかかわるものであったため、会員相互のあいだに活発な討論が行なわれた。また本大会の運営についても、貴重な助言をいただいた。これらの助言を参考に、専門に特化した学会とは異なる本大会の特色を生かした運営について、さらに研究しなければならないと考えている。

(研究委員 瀬地山 敏)